



福島成蹊中高一貫

学校通信

令和元年12月21日

令和元年度

第10号

自分から始めるSDGs

校長 本田 哲朗

年末なのに、新年より明日(冬至)を境に昼の長さが回復するのが待ち遠しい自分がある。思うに、北方系を自認しても、意外にも高緯度には住めない立ちなのか知れない。

ところで、水の恐怖は東日本大震災で解っていたが、改めて大雨がもたらす水の脅威を知らされた。千曲川のTV映像を見て脳裏に浮かんだ事は、中国の歴史の一コマ…、大河の氾濫だった。確か中国皇帝のシンボルは五指の龍である。それは農耕民が恐れた、黄河の氾濫である事を以前に本で読んだことがあった。暴れる龍とは、恐れの実態であり、かつ実の存在としての皇帝である。換言すれば、水を制したモノが君臨出来たと言って良いかも知れない。その昔、秦の始皇帝、嬴政は黄河(龍)を手なずけんとした。彼は涇水(黄河の支流の1つ)に鄭国渠(一種のダムと運河)を設ける事で、乾燥地を豊かな農地に変え、国の経済を著しく改善し、強大な軍勢力を手にした。こうして戦国の七雄から抜きん出て、初代皇帝となったのである。一般に窮地の時こそ、ピンチ(災い)を(転じて)チャンスに(福となす)と言われるが、河の氾濫を殖産に転じた始皇帝の発想は、やはり並ではない。

平成は終わり、令和が始まる年に印象深い自然現象は、何を差し置いても温暖化だと思う。コップ25(国連気候変動枠組み条約第25回締約国会議)が閉幕したが、190もの国と地域(人が住む地球上の殆ど)が求めた事は、地球の悲鳴である。これは、誰もが否定できない事実と実感だ。先進国の恵まれた生活に浴している私達は、これをどの様に受け止め、理解し、どう行動しなければならないのだろうか。勿論、私達には“初め些細な揺らぎが、やがて大きな破壊に繋がる事を予想できる能力”は備わっていない。しかし、我が国の教育レベルは、何が二酸化炭素を増やす行為なのかを理解するには十分なはずで、身近な所からでも温室効果ガスの減少のために、行動できるのではないだろうか。例えばゴミを減らすとか、生活の中で出来るだけ歩くとかである。また、森林の保護は無理でも、木を植えるとか。身近には節電も効果が大だし、スマホの使用時間を半分にするなんていうのもいい。些細な事でも、70億オーバーの人口なので、積算すれば馬鹿にはならない。

実の所、“小さな蝶の羽ばたきが、やがて台風に成長する確率”までスーパーコンピューターで計算できる時代である。一般には知られていないが、地球温暖化のシミュレーションでは、地球の危機が間違いなく解として算出される。残念な事は、解は導けてもこの認識を国家レベルで行動に移せないことだ。それならば、この様(ざま)をしり目に見ながら、自分の判断で出来る所から、行動しようではないか。



※SDGsとは「Sustainable Development Goals (持続可能な開発目標)」の略称